

「JENESYS2025」日本青年研究者訪中国の記録

1. プログラム概要

【目的】本事業は、2025年10月19日(日)～25日(土)の日程で、中国社会科学院の招聘に応じて日本の大学・研究機関等に所属する青年研究者を中国に派遣し、中国の政府・党関係者や中国社会科学院を始めとする青年研究者との意見交換等を通じて互いの理解を深めるとともに「デジタル時代の伝統文化」をテーマに視察・参観し、中国についての多面的な理解を深めることを目的として実施しました。

【参加者】日本の大学・研究機関等に所属する青年研究者等 10 名

【訪問地】北京市、山西省大同市

【日程】

■プレプログラム

2025年10月9日(木) オンライン事前オリエンテーション

■派遣プログラム

2025年10月19日(日)～10月25日(土) 6泊7日

10月19日(日) 北京首都国際空港より中国入国

10月20日(月) 【訪問・交流】中華人民共和国外交部

【視察】「可能有書」書店、27 院児、前門大柵欄

【歓迎会】中国社会科学院日本研究所

10月21日(火) 【意見交換・交流】中国社会科学院日本研究所

①座談会 自由討論形式

【訪問・交流】中国共産党中央対外連絡部

10月22日(水) 山西省大同市へ移動

【視察】懸空寺

【夕食交流会】大同市

10月23日(木) 【視察】雲崗石窟、大同市博物館、大同古城

【意見交換・交流】大同市博物館

①座談会 テーマ「雲崗芸術のデジタル化」「伝統文化・文物の保護と社会発展」

10月24日(金) 北京市へ移動

【視察】中国考古博物館

【意見交換・交流】中国歴史研究院考古研究所

①講義「崑崙石刻について」講師：中国歴史研究院考古研究所 研究員

②質疑応答

【報告会】訪中成果・帰国後の活動計画発表

10月25日(土) 北京首都国際空港より中国出国

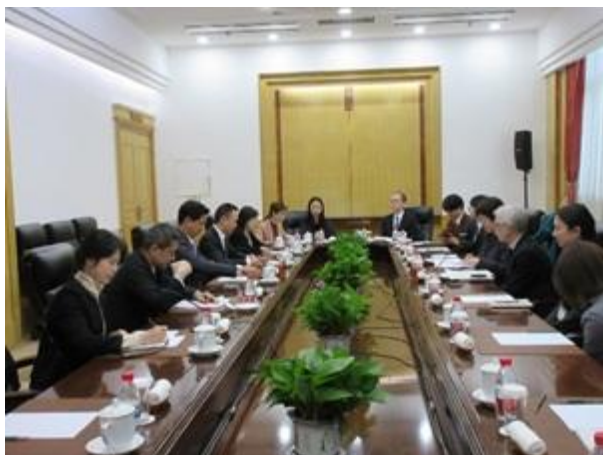
2. 記録写真



10月20日【訪問・交流】
中華人民共和国外交部



10月21日【意見交換・交流】
中国社会科学院日本研究所



10月21日【訪問・交流】
中国共産党中央対外連絡部



10月23日【視察】雲崗石窟



10月23日【意見交換・交流】大同市博物館



10月24日【視察】中国考古博物館

3. 参加者の感想（抜粋）

◆中国では、中国社会がすでになんかの発展をみせているにもかかわらず、日本人が中国に良いイメージが無いのは、メディア等の影響で中国の真の姿を見ていないからとの認識が根強い。それ故に、中国は日本人を中国に招いて等身大の中国を見て欲しいと考えている。こうした話が訪問中幾度も繰り返されていたことが印象的であった。また中国でも来るべき高齢化社会に備え、高齢者が活躍できる地域コミュニティの形成といった取り組みが行われるようになっている。ここでは、共通の課題に長らく直面している、日本に学ぼうとする姿勢が強かった。こうした社会問題の解決に関しては、より一層お互いに知恵を出し合う余地がありそうに思う。そして大同市博物館や歴史研究院での座談会では、中国による最新の文物保護の取り組みや、考古発掘の成果を紹介していただけたが、その中でも日本人の過去の業績がかなり認知されており、重視されていることがうかがえた。やはり伝統的な面に関して、もっとも深く理解しあえるのが日本と中国だと思う。

◆私は、中国の伝統文化に親しみを持っていたつもりでした。しかし、恥ずかしながら、実際は日本の源流という意味で中国の文化を見ていたに過ぎず、中国自身の文化、そして現代の中国について関心を向けていたかと問われれば、そうではなかったということに気づきました。これは中国の方と対話したことで気づいたことでした。一度、日本というフィルターを通さずに中国について目を向けてみれば、長い歴史と地方ごとに特色のある景色や文化の違い、一括りにはできない多様性に満ちた国であることに気づきます。

また、今回の訪中で、現在の中国では、博物館や美術館、遺跡などに若い人が多く来場されていることを知りました。文化への関心を高めるためにどのような取り組みが重要であるか興味があったので、現在の中国の姿から学ぶことは多いと感じました。そのなかでも特に、伝統文化の現代化という言葉が印象に残っており、博物館だけでなく街の中や日常に、文化が浸透している様子を実際に見ることができました。

都市化、電気自動車の普及、電子決済の普及など、先端的な街の様子に、これまでのイメージとは異なる中国の姿を見ることができました。

◆どの訪問先でも、伝統を保存しつつ、積極的に活用していこうという姿勢が見られた。考古学博物館では、展示ケース自体に文物の見どころが浮かび上がってくるという最新技術が用いられており、今後の博物館のあり方を大いに考えさせられた。雲崗石窟では、歴史的な観点から造像銘を読む際に問題となる鮮卑の習俗と柔然と北魏の関係について疑問を述べ、その知見についてご教示を得ることができた。また最新技術でこれまで判読が難しかった墨書を読むことができるようになりつつある状況についても伺えた。中国歴史研究院考古学研究所での交流では、青海省の発掘担当者に古代交通路の発掘の意義を問い、蘭州から青海省へ至るルートと四川から青海省に至るルートのどちらも重要ルートであることを確認できた。専門的な交流は同じ知的基盤に立つて行うもので、相互理解促進に不可欠な行為であると改めて感じた。

4. 報道記事（抜粋）等



2025 年 10 月 27 日 大同日報

「日本青年研究者訪中団が大同市を訪問」

大同市で「デジタル時代の伝統文化」をテーマに関連した視察や中国の関係者と交流した内容を紹介。

5. 報告会での訪中成果とアクション・プラン発表



【訪中中の学び】

中国側が繰り返し仰っていた対話の重要性。このように対話の重要性を訴え実際に門戸を開き、多くの対話の機会を作っていただいた中国側の懐の深さに感動しました。

今回の訪中で、現在の中国では、博物館や美術館、遺跡などに若い人が多く来場していることを知りました。若い頃から自国の文化と触れ合った彼らが、今後どのような新しい文化を作っていくのか、とても興味深いです。

【アクション・プラン】

一つ目は、日本国内での展示会の実施です。雲崗石窟の歴史、日本との関わり、そして最新のデジタル技術を用いた研究の最前線について、団員の力を合わせて日本国内で展示を行います。

二つ目は、現代中国のコミュニティにおける文化や芸術の活用について、日本に周知していくことです。中国のコミュニティーアートの現在を東京芸術大学の紀要に研究ノートとして投稿し、紹介したいと思います。

【訪中中の学び】

滞在中、最も印象的なことは、中国側のスタッフや研究者などが話す流暢な日本語です。日本文化や言語への強い関心がバックグラウンドにある人々との交流は、日本人として大変嬉しく思うと共に、中国へ強い関心を抱く自分自身も、もっと中国語を学び、文字通り腹を割って中国の人々と話したいという気持ちの高まりに繋がりました。

【アクション・プラン】

- ・雲崗石窟に関する講演会を所属大学で開催します。この内容について、学術雑誌に論文やコラムを掲載します。

- ・博物館などで見た文物の調査を行い論文に利用したり、日中関係に関する論考の執筆、日中間の外交に関する研究会に出席するなど、今回の訪中で得た知見と、新しく知り合った研究者とのつながりを研究に活用します。

実施団体名：（公財）日中友好会館